

NewsLetter

Sports Medicine Research Center, Keio Univ.

No. 37

慶應義塾大学スポーツ医学研究センター
ニューズレター 第37号
[2021年3月発行]

特集



開催報告

第45回日本足の外科学会学術集会を開催して

第45回日本足の外科学会学術集会会長
慶應義塾大学スポーツ医学研究センター教授

橋本健史

まず、今回のCOVID-19 pandemic に対して日夜献身的な治療、介護をされている全国の医療従事者のみなさまに、心より感謝と尊敬の念を捧げます。世界中の感染が一日も早く収束することを切に願うものであります。

このたび伝統ある第45回日本足の外科学会学術集会を開催させていただきました。私にとって、この上ない光栄なことでございました。私の所属いたします慶應義塾大学整形外科学教室同門での本学会の会長は、第14回の加藤哲也先生(1989年)、第24回の井口傑先生(1999年)、第33回の宇佐見則夫先生(2008年)、第40回の須田康文先生(2015年)に続き、私で5年ぶり5人目となります。その重責に身の打ち震える思いがいたしました。

私は今回のテーマとして、「アスリートのための足の外科—2020—」を打ち出させていただきました。言うまでもなく、2020年は東京オリンピック・パラリンピックの開催される予定の年でした。オリンピックは1年延期となりましたが、スポーツの魅力、意義といったものが大きく注目される年でありました。私は日常よりさまざまなアスリートのスポーツ障害・外傷を診る機会があり、アスリートの足障害の治療には手術だけでなく診断からリハビリテーションやリコンディショニング、さらには障害予防といったトータルな概念が必要であると考えました(図1)。

そこで今回の学会では、包括的な足スポーツ障害のマネジメントとしてシンポジウム「アスリートの足疾患に対する集学的治療—診断からリコンディショニングまで—」を企画いたしました。手術、理学療法、メンタルサポートなど、さまざまな分野から専門家の先生に最新の知見を話していただきました。また、スポーツ障害予防につながるものとして、シンポジウム「足部足関節のバイオメカニクス—ランニングとジャンプで何が起

こっているか—」を企画いたしました。さらに、「超音波検査の足部疾患への適用」、「満足度を高める外反母趾治療」、「遠位脛腓靭帯損傷—その現状と課題—」、「アスリートのオーバーストRESS障害—その現状と課題—」と計6個のシンポジウムを企画しました。

図1 第45回日本足の外科学会学術集会ポスター

さらに、「変形性足関節症に対する骨切り術の実際」、「新しい足底挿板を求めて—足底挿板の現状と未来—」、「フットケアと足の外科—リエゾンカンファレンス—」の3個のパネルディスカッションを企画いたしました。いずれも学会の第一人者の先生に座長、演者をお願いし、きわめて聞きごたえのあるものになりました。出席いただきましたみなさま本当にありがとうございました。

また、基調講演を一般社団法人日本足の外科学会新理事長・奈良県立医科大学の田中康仁教授をお願いいたしました。「足のオールラウンダーを目指して」というタイトルで、若手ドクターが持っているべき足の外科の幅広い基礎知識と日本足の外科学会の歴史と今後の進むべき方向性を話してくださいました。また、特別講演を公益社団法人日本整形外科学会理事長・慶大整形外科の松本守雄教授をお願いいたしました。「超高齢社会における本邦の整形外科の課題」のタイトルで、高齢者が人口の21%を超える超高齢社会において整形外科が今後取り組まなければならない課題について、データを上げながら詳しく解説してください、今後の日整会の進むべき方向を指し示していただきました。

教育研修講演を5題企画いたしました。私の恩師であります井口傑先生には、「私の学んだこと」というタイトルで、外反母趾に対するDLMO法についての詳しい解説をしていただきました。宇佐見則夫先生には、「スポーツ競技者における外傷・障害の治療計画」として、代表的なスポーツ外傷・障害に対する治療のコツを解説していただきました。聖マリアンナ医科大学整形外科学教室の仁木久照教授には、「SAFE-Q 誕生から10年と今後の果たす役割」と題して、仁木教授が主導して作られた、日本独自の患者立脚型のスコアシステムについて、その誕生の経緯、現状から今後の進むべき道まで詳細に御講演いただきました。統計学の世界的権威である大阪市立大学医療統計学の新谷歩教授には、「研究の質を高める統計チェックリスト」と題して、*p* 値の話から、パラメトリック、ノンパラメトリック検定といった医療統計で重要なことを若手にもわかりやすく講義していただきました。AIの世界的権威である慶應義塾大学医学部医療政策・管理学教室の宮田裕章教授には、「New Normalの先にある新しい社会とヘルスケア」と題して、コロナ禍でいっそう早まった、データ社会への変化について、どうやって対応していったらよいのかという貴重なお話をしていただきました。

また、特別企画として、「足の外科における多施設共同研究—日本から世界への発信のために—」を企画しました。私が学術委員長だった3年ほど前からその最初の立ち上げから携わったプロジェクトです。オールジャパンで多施設コホート研究を行い、エビデンスの高い研究を世界に発信しようという試みです。千葉大学の山口智志先生から「外反母趾に対する手術療法は、足以外の体の痛みを改善させるか?」、聖路加国際病院の天羽健太郎先生から「足関節捻挫多施設共同研究—共同研究立案から開始まで—」の研究報告をしていただきました。

学会場は、当初、東京の虎ノ門ヒルズフォーラムを予定してさまざまなイベントの準備をしてきました。しかしながら、COVID-19感染状況を鑑み、現地開催を断念し、Web開催といたしました。なるべく、スムーズで夢のあるWeb学会とすべく努力したつもりですが、突然の変更であり、初のWeb学会ということもあり、手探りのなかでの開催でした。特に世界的な不況のため、協賛企業が次々に撤退してしまったことは大変でした。また、シンポジウムやパネルディスカッションをどうするかという問題があり、初めはリアルタイム配信を考えていました。しかし、他学会で、予定演者が来ないとか、通信が途絶えてしまうとかのトラブルがあったことを聞き、やはり同時配信はリスクが伴うという結論に至り、4週間前頃からのZOOMを用いてのビデオ収録としました。会長である私が毎回ホストとなり、全シンポジウムを録画しました。これが2週間ほど、毎日続き、かなりしんどい思いをいたしました。また、教育研修講演で、座長を立てなかったために、演者の紹介がおろそかになりました。やはり、座長をしっかり立てて、演者紹介をするべきだったと反省しております。

今回、期せずしてWeb学会となったのですが、その欠点、利点について述べたいと思います。やはり、同じ研究分野の全国の同志と会えないというのはつらいことでした。学術集会は、やはり、セッションだけではありません。その合間のちょっとした時間とか、廊下ですれ違ったときなどに、仲間と会話を交わし、そのなかで思わぬ発想が生まれたり、問題の解決策が見つかったりします。また、普段の業務から完全に開放されますので、自由な時間を十分に学術集会用に使うことができます。Web学会では、どうしても1日完全に休んで学会にというわけにはいきません。いきおい、夜とか日曜日ということになってしまいます。かえって疲労がたまる可能性があります。

ただ、Web学会は欠点だけではありません。利点として、自分の興味のある演題だけを選択して聞くことができる点、また、ストップしたり、何度も見返したりして重要部分の見逃しなくなる点があげられます。また、今まで、同時に2会場を視聴することはできませんでしたが、Web学会では、それが可能です。また、今後ももちろん演者の承諾が必要ですが、アーカイブとして学術集会を動画として記録、保存していくことが可能です。

今後は、リアルとWebの学術集会の良いところを総合していく方向へ、すなわち、ハイブリッド学会の方向へと進んでいくべきではないかと考えます。ただその際、2倍近い費用が必要となってきますので、今後重要なことは、

- (1) Web会議システムの競争による値下げ
 - (2) 学会参加費の値上げ（企業は撤退していきます）
 - (3) リアルの学術集会の簡素化
- ではないかと考えます。

本学会には、共同開催となっていただきました、勝川史憲所長をはじめとした慶大スポーツ医学研究センターのスタッフのみなさま、日本足の外科学会理事、評議員の先生方、および慶

大整形外科同窓会諸先生の物心両面にわたる強力なサポートをいただきました。本当にありがとうございました。また、時間を惜しまず協力をしていただいた、慶大足の外科班実行委員会の諸先生に厚く御礼申し上げます。最後に、レディースツアアの企画など一生懸命に協力してくれました妻、美佐緒にこころよりの感謝をいたします。本当にありがとうございました。



シンポジウム風景（ZOOMの画面より）

《《《《 コロナ禍におけるスポーツ医学研究センターの活動について 》》》》

新型コロナウイルスの感染拡大が深刻な状況となるなか、大学キャンパスへの立ち入りは厳しく制限され、授業のオンライン化が進められました。学生団体の課外活動も制限され、スポーツ医学研究センターも業務のほとんどを停止せざるをえない状況となりました。多くの制限があるなかで、スポーツ医学研究センターが進めてきた本年度の活動をご報告します。

「強くなるためのスポーツ医学基礎講座」

従来の対面での講座に代わり、ホームページのコンテンツを充実させ公開し、体育会に周知しました。

- ① スポーツ活動と熱中症予防のページを作成
- ② スポーツ現場における脳振盪 Sports Related Concussion (SRC) への対策ページを作成

また、栄養講座に代わるものとして、公認スポーツ栄養士の橋本玲子先生とスポーツ医学研究センターが共同で「アスリートのための『食と栄養』FACT SHEET」を作成し、体育会へ

配布し、アスリートサポート栄養相談のページ<<http://sports.hc.keio.ac.jp/ja/athlete-support/performance/nutritional-consultation-2.html>>で公開を行っています。

- ③ アスリートのための「食と栄養」FACT SHEETの定期発行とホームページでの公開
 - 01号(6月発行)長引く新型コロナウイルス 大学生アスリートが食生活で注意すべきポイント
 - 02号(7月発行)コンビニや外食でより健康的にメニューを選ぶコツとは？
 - 03号(8月発行)体づくりとコンディショニングのために自炊を始めよう！
 - 04号(9月発行)夏の疲れを和らげる(4つの)生活習慣
 - 05号(10月発行)試合に合わせた食事計画
 - 06号(11月発行)リカバリーのための2つのR(図1)
 - 07号(1月発行)冬場のコンディション管理と栄養

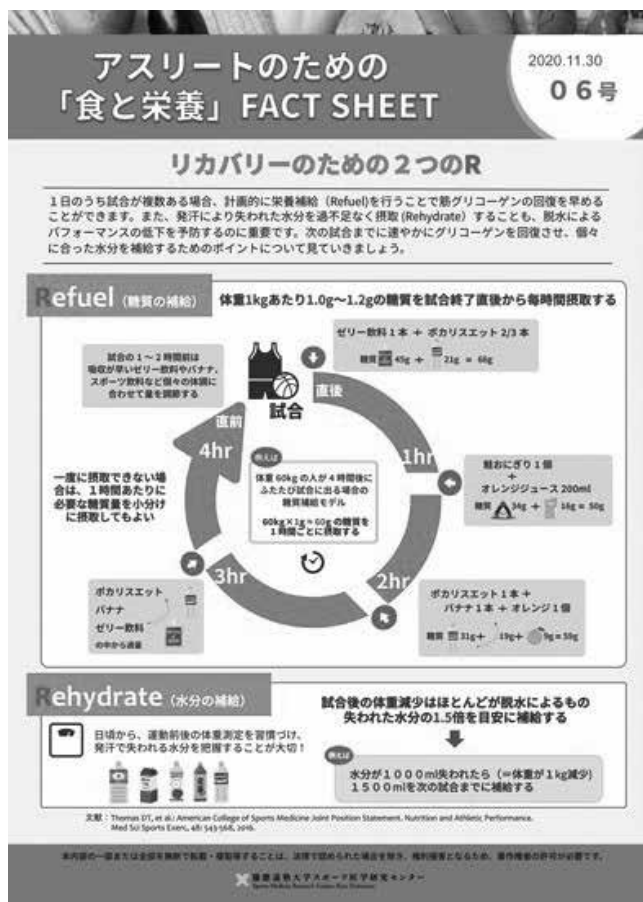


図 1

「体育会部員対象 BLS（一次救命処置）講習」

毎年、体育会新入部員を主な対象として行っている BLS 講習を、「BLSの流れ」として図式しホームページに公開しました。また、講習でよくでる質問を「Q&A」にまとめ掲載し、体育会に周知しました。

「アスリートサポートのオンライン化」

リコンディショニングサポート、メンタルトレーニング、スポーツカウンセリング、女子アスリートサポート、貧血などの健康相談を Zoom または Webex によるオンライン化を行いました。

「スポーツ活動再開に向けたロードマップ作成のための重要ポイント」を公開

体育会がスポーツ活動を再開するにあたり必要とされた、ロードマップ作成のためのポイントをまとめホームページに掲載し、希望があった団体にはアドバイスをいたしました。

「ウェブによる体育会学生心臓検診問診票の実施」

本年度は、保健管理センターによる学生健康診断が実施されなかったため（Web問診と胸部レントゲンは実施）、体育会やその他スポーツ団体の部員を対象に、Google フォームを使用した心臓検診（ウェブ問診）を行いました。

回答のスクリーニングを行い、必要に応じてメールでの確認、心電図等の追加検査を行いました。

担当：真鍋知宏専任講師（循環器内科医師）

回答数：2,455 件（有効回答者数 2,309 名、うち新入生 503 名）

結果：メールによる問い合わせ対象は 16 名であり、心電図等検査を追加したものはいませんでした

「体育会対象血液検査」

例年 6 月に行っていた血液検査は中止とし、希望する団体は個別対応にて実施しました。

「教職員対象オフィスストレッチ動画を公開」

教職員の運動不足やストレス解消を目的とした、デスク周りでできる動きを中心に手軽に行えるストレッチの動画を YouTube に限定公開し、Kif3 とホームページに情報掲載しました。

担当：木畑実麻（NATA 公認アスレティックトレーナー）

内容：下肢、首回り、肩周り、腰周りのストレッチ
各回 10 分程度

「教職員対象運動教室をオンライン開催」(図 2)

対面で行っていた運動教室を Zoom によるオンライン教室に変更し行いました。

担当：高木聡子（厚労省認定ヘルスケアトレーナー）

内容：ストレッチや軽い筋トレ、健康に関する質疑応答等

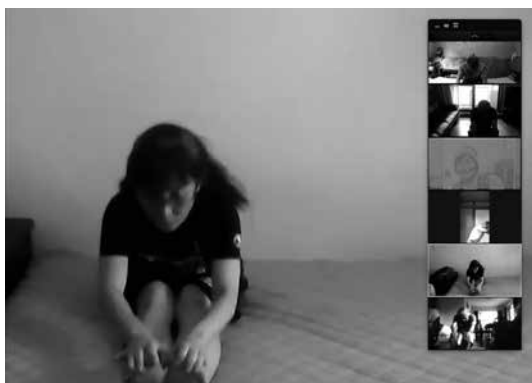


図 2

「WHO 新型コロナウイルス感染症の感染拡大時にも積極的に Q&A 日本語版を公開」

世界保健機関（WHO）がリリースした「COVID-19 感染拡大下の身体活動についての Q&A」日本語訳を作成し、ホームページで公開しました。

「慶應スポーツ SDGs シンポジウム 2020 ～新常態における持続可能なスポーツ・身体活動～オンライン開催」

主催：慶應義塾大学担当：スポーツ医学研究センター、大学院健康マネジメント研究科、大学院システムデザイン・マネジメント研究科、体育研究所、SFC 研究所 × SDG ラボ、医学部スポーツ医学総合センター、グローバルリサーチインスティテュート
(ニューズレター No.36 に開催報告を掲載)

「2020 横浜スポーツ学術会議公開講座 オンライン開催」

座長：小熊祐子准教授

「第 45 回日本足の外科学会学術集会 オンライン開催」

会長：橋本健史教授

今後の活動について

新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、私たちの生活スタイルに大きな変化をもたらしました。今号のニューズレターでは、スポーツ医学研究センターの臨床・教育活動で、こうした生活スタイルの変化に合わせた変更内容の一部をご紹介します。ご紹介した他にも、講義形式で行ってきた「スポーツ医学基礎講座」は、今後、動画配信のライブラリ化により、いつでもアクセスできる形態への転換を計画しています。これは、より広い対象に受講させて欲しいという体育会 OB の皆様からのご要望に応えることにもなり、パンデミックが革新をもたらすきっかけになったといえます。

一方で、人と人の密接なコンタクトや種々の測定に制限が生じる中、研究活動には深刻な影響が生じています。また、2次元で、しかもコミュニケーションが必ずしも十分とれない現状の情報伝達は、とくに身体技法に関連する分野では限界も実感します。こうした限界を見極めつつ、利用できる環境は可能な限り取り入れ、活発な臨床・教育・研究活動を維持していく所存です。引き続きご要望などお寄せいただき、ご支援ご鞭撻をお願い申し上げます。

慶應義塾大学スポーツ医学研究センター所長 勝川史憲

Newsletter No.37

慶應義塾大学スポーツ医学研究センター ニューズレター 第37号

慶應義塾大学スポーツ医学研究センター Sports Medicine Research Center, Keio University

発行日：2021年3月10日

代表：勝川史憲

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1 慶應義塾大学スポーツ医学研究センター TEL:045-566-1090 FAX:045-566-1067 <http://sports.hc.keio.ac.jp/>